

金匱要略記載の大气一転の一考察

莊 明仁¹⁾, 平崎 能郎²⁾

¹⁾台湾 瑞聯中医クリニック, ²⁾中国中医科学院广安門病院

「大气一転, その気乃ち散ず」は金匱要略水気病篇が出典で, 治療上重要な記載であり, その解釈は臨床上重要である。「大气」の字は金匱要略ではここにしか記載されていないが, 「大气を整える」ということは金匱要略を代表する理論の一つであり, この点に着眼することは同書の医学思想を理解する上で一助となる。

原文は「師曰く, 寸口脈遅にして洪, 遅なれば則ち寒となし, 洪なれば血不足となす。趺陽脈微にして遅, 微なれば則ち氣となし, 遅なれば則ち寒となす。胃氣不足すれば則ち手足逆冷す。營衛不利ならば則ち腹滿腸鳴相逐い, 氣膀胱に転ず。營衛ともに勞し, 陽氣通ぜざれば即ち身冷え, 陰氣通ぜざれば即ち骨疼む。陽前通すれば, 則ち悪寒し, 陰前通すれば則ち痺不仁す。陰陽相得て, その気は乃ちめぐる。大气一転, その気散ず。実ならば則ち失氣し, 虚ならば則ち遺溺す。名づけて曰く氣分。」である。黄帝内経素問および靈樞にはこの「大气」の単語は様々な個所に記載がある。歴代の医家は大气を内経に基づき解釈しているが, それぞれの医家により見解は異なる。沈自南は大气の二字を〔ニクヅキ+竈, ダン〕中の宗氣であるとし, 喻嘉言は『医門法律』大气論で大气は胸中の氣であり, [ニクヅキ+竈, ダン]中の宗氣とは異なるとしている。内経の記載は一箇所ではないため, 各篇によって大气の意味は正候のこともあれば悪候のこともある。山田業広が『九折堂読書記』金匱要略部分の本条には「一は則ち大邪の氣を謂ひ, 素問熱論の王冰注の如き(中略), 一は則ち宗氣を謂ひ, 馬氏氣穴論注云ふ大气即ち宗氣, 靈樞五味篇に云う大气胸中に積り, 刺節真邪篇に云ふ宗氣海に流る, 本条言ふ所即ち宗氣なり」とかかれていて, 大气には邪氣と宗氣の二つの意味があるとしている。このような業広の推論は主に靈樞五味篇の「その大气のあつまりて行らざるは, 胸中に積るなり, 命じて曰く氣海」, 靈樞邪客篇の「宗氣胸中に積る」, また刺節真邪篇の「宗氣海に流る」の記載に基づいている。

さて靈樞五味篇の該当個所の前後を含めた原文は「穀始め胃に入り, 其の精微は先ず胃の兩焦に出ず。以って五藏を溉し, 別れ出で營衛の道を兩行す。其の大气の搏りて行らざるは胸中に積る, 命じて曰く氣海と。肺に出て喉咽を循る, 故に呼すれば則ち出で, 吸すれば則ち入るなり。天地の精氣, 其の大多数は常の三出で一入る。故に穀入らざること半日ならば則ち氣衰へ, 一日ならば則ち氣少し」と記載されている。このところを仔細に考察すれば, 胃が水穀を受納した後, 胃の腐熟作用を経て産生されたものは初期の胃氣とも呼ぶべきものであり, 人の氣が盛んになったり衰えたりするのは受納した水穀の多寡及び胃の転化作用による所が大きいと解釈できる。また靈樞五味篇には「胃は五臟六腑の海なり, 水穀は皆胃に入り, 五臟六腑は皆胃に稟す」とも記載されている。よって, 氣の源は胃氣であり, 穀化し氣となり, これが大气であり, その中で胸に集まるものを宗氣という。宗氣は大气を組成する一つにすぎず, 「搏(あつまり)りて行(めぐ)らざる」ことを無視して, 大气と宗氣が同じであるという結論に達しているのは正確とはいえない。胃氣とは人体が作り出す氣のうち最初でかつ最大のものであり, このため大气と呼ばれているのである。「寸口脈遅にして洪」「趺陽脈微にして遅」とは全身の氣血不足は胃氣不足によるもので, 胃氣の趺陽脈を記載することで胃氣の不足を強調し, さらに手足の厥冷の症状を示す事で, 營衛不利によって生じた陽氣の不通や前通などを記している。さらには「転」は「転動」「運轉」の転であり, 「大气一転」ははじめに生じた胃氣が順調に機能を発現してはじめて, 「心下堅, 大さ盤の如く, 辺り旋杯の如し」の症状記載のように心下に積聚した寒氣が温散されるのである。